

ばあさんが亡くなった。「ばあさん」と言っても義理母である。危篤で「もうダメ」を何度か繰り返して、「お腹がすいた、何か食べる」と言っていた2,3日後の、大往生だった。98歳とはすごい。しかもほとんど“ボケ”はなく、車いすでも何処にでも移動できる、しっかりした状態で、老健という施設に入っていた。

オレは若いころから、大事にしてもらって、「食え食え」といろんなものを食わせてもらった。酒も飲ませてもらった。孫ができると、彼女らにも「食え食え」と言っていた。広島県三原市から少し行った処で生まれたそうだ。前が海でドックがあって、小さい頃から深い海で浮かんで遊んでいたそうだ。後はミカン山だったそうだ。大阪に来て、じいさんと結婚して、トウチャンカアチャン鉄工所を営んでいた。じいさんもばあさんも働き者だった。驚いたのは、毎朝、4時頃起きて掃除、洗濯、掃除とコマネズミ状態で働いていた。当時オレは4時頃に眠りについてたかな。

葬儀は近所の市の斎場で、こじんまりと済ませた。98歳ともなると、友人兄弟は誰も無く、また子どもが一人なので、70歳近い姪が二人、オレンチの家族、オレの弟夫妻、と10人足らずしか集まらない。彼女が創価学会に入っていたので、学会の導師さんと友人4人が来て下さり、法華経を読んでくれた。小さい部屋で、アットホームな、和やかな葬式だった。斎場の人が、骨を一つ一つ手にとって、説明してくれた。その人の手も優しそうだった。オレ自身の母親も、半世紀近く前にここで焼いた。当時は木造の焼き場だった。あれはつらかった。

“おこつひろい”を待つ間に、「おやじはどんな葬式がいい」と娘が聞く。そう言われてオレは決めた。

☆今日のような家族葬がいい。値段も安いので、市役所がいい。みんな、親切だった。

☆本名がいい。戒名が要るなら友達に頼む。やはり本名がいい。

☆司会は斎場の人が親切でうまい。テープでナンマイダと、グレゴリオ聖歌を流したらいい。

☆香典で葬儀代ぐらいは払えるだろう。

☆大口を開いて笑っている写真と、絵の写真を10枚ぐらい並べてくれ。花は少しでいい。

☆死んでから、骨になるまでの3日間、うまいものを食って、いっぱい飲んで、楽しくやってくれ。

☆骨は市の方に頼んで、棄ててくれ。

☆寺も墓も縁切り、じゃ！

なんて、悟りきった事を言っているが、まだまだ20,30年も生き恥を曝すやも。その節はみなさん共に遊んで下さいよ。

図版は、色紙大の水彩画 この手の絵昔少々売れた。今はタブローが多くなった。

夢の中で議論をしていた。相手は30歳代によく会っていた、一回りも年上のおっさんですが、30年経って彼も年相応に彼も老人になっていた。展示会の会場での、飾られた絵を前に「ああでもない」「こうでもない」と解釈の話。描く作業での詰め方、何であそこにこういう作業をして、あんなふうにもっていくのはおかしい。いや、根本的に、本質的に“何かが”が希薄になっていて、その先の作業自体が、宙に浮いている。なんて、そのおっさんに詰め寄っていたら、次に彼の逆襲が始まった。30年前の当時と同じように顔を真っ赤にして、唾を飛ばし「・・・なんで」「・・・おかしい」登。本当におかしいが、夢の中で真剣に話し合った。まだ生きておられるかどうか、ニュースは無いが、当時“いい絵”を描いていた。オレが“いい絵”というのだから、彼、地位も名誉も金もなかった。

“いい絵”なのに何故世に出ないかと言えば、彼のやっていた仕事が「そう言えば、何年か前にどこかで見たことあるぞ」「あれはあれのコピーと違うかな」というのが致命的だ。絵は何世紀にもわたって、世界中の人が描いてきた。平面に絵具で描かれ

たものが絵なら、溢れんばかりに星の数ほどに絵はある。似た様なやつもあるわけだ。地元、近所の駅に、市の企画で、でっかい像が建った。実物は見ていないが市の広報誌を見ると、「鉄腕 28 号」とか「リカちゃん人形」と同種のフィギア作品のようだ。現代美術の世界の最新流行のようだ。一般市民が、難なく見れて、触れて、親しめて、微笑めたら、それはまたよしだろう。ただオレの予想では、このてのアートも一過性のものだろうか。

ラジオで科学の先生が、コペルニクスの話だったと思うが「自分より昔の人も、他の人も、こういつている」と地動説を解いていたとか。今の時代論文で、「この説は以前に発表されているが……」なんて言うと、その場でその論文は却下されますね。科学の世界はそういうものです、と言っていた。いやいや先生そうおっしゃるが、美術の世界もそうなんです。勉強始めた若い頃、「誰もやってない実験的な画」を目指して、大阪の具体美術の人たちが大暴れしていた。当時 TV もない時代、映像ニュースは映画館で映画の合間に流れていた。そんなニュースの中に、スイカを地面に投げつける、紙を貼った何枚もの枠を破りながら走る、こんなニュースが流れていたのを覚えている。芸術とはけったいなものですねと中学校の数学の教師が授業中に言っていた。それが大阪で生まれた具体美術だった。具体美術自体、今も世界的に語り継がれている。絶賛されている。

オレもえらそうに言っていますが「お前の絵、何かに似ているな」「お前の絵とちかいやつ、前どこかにあったぞ」といわれているかもしれない。ま、今さら変えられないし、オレの絵はこんな絵だ。ところで、こししばらく、オレの貧弱な琴線に、そして魂に触れる仕事に出合わない。すごいアートに出合わない。誰か見せてくれ。その時に発せられる光、くぐりぬける風、オレは宇宙に飛翔するやも。

0057 桜 090412

桜が咲いている。桜が満開だと世の中騒いでいる。いつまでも寒い(4/1 朝)。ストーブが欲しいと思うぐらいに寒い。1 カ月前靴下を脱ぐと、小指から二番目の指先が赤い。「病気か」と思って何日かしても赤い。それから何日かして、次の指も赤くなった。「え、しもやけ、か」と笑ってしまった。しもやけなんぞ餓鬼の頃以来だ。どうも、アトリエの板張りの床を、靴下 1 枚でうろうろしていたので冷えたのか。今年は例年より寒かったという。

展覧会の準備に、針金とヒートンを買いにしかけた。近所に“桜通り”という通りがある。何十年か前まで、市の中心部を横切る大きな農業用水路があった。ここら辺りは水田が広がっていた。当時駅前を 5 分も歩くと、見渡す限り田んぼだった。人口が爆発的に増え、農地が宅地になった。農業用水路を埋め立てて、車の通る道、人の歩く道、幅の広い緑地帯、その中にも遊歩道を作って桜をたくさん植えた。何十年も経って、立派に樹木が生い茂り緑いっぱい桜通りとなった。オレ、いつもの散歩は、反対側の安威川の河川敷に行ってしまうが、この緑地帯もいい。たくさんの人が一日中歩いている。それに市の中心部に在るのがいい。名前の通り桜が満開で、この季節の 10 日間ぐらい、市が主催してトイレ、紅白の幕の中に茶席やら、ガードマン詰所やらを作る。たくさんのお若男女が集まって、シートを敷き車座に弁当を広げて賑わっている。

今、とある文章を読んでいると、地方の疲弊、都会の一部が富を享受して格差が広がった。地方で育まれてきた共同性、地方で守られてきた、伝統習慣が破壊されてきている・・と続く。コレを読んでいる、オレ今までの考え方が、ちょっと間違っていたのかもしれないと思い始めた。都会に人口が集中して、文化、教育、富、が集まるのはよくないのでは、不自然なのではと思う。「くだらない伝統や因習は要らない、自分の意見ははっきり言おう」というのは間違いかもしれない。人々が共に生き、共に暮らし、人々が作ってきた、村社会、決まり、伝統、因習そんなものをまとめて享受する、行使する、そして作り上げていく。地方の村、海の傍、山の麓、森の中、そんな田舎に人が住めるようにならないのか。昔のように三世代の人たちが住める村、人が住める村を作る事が、そんなに難しいことなのか。「田舎では食べていけない」「病院が無い」「教育ができない」「仕事が無い」と次々出てくる。50 年前、100 年前まで、今の過疎地に人はいっぱいいた、賑わっていた、と聞く。元に戻せないものなのか。これから少し、社会という事を考えてみよう。誰か教えてくれ。

桜を愛でる人を見て、そう思った。皆さんゴミぐらいは持ち帰ってね。がっかりさせるなよ。

0058 展覧会まちか 100412

いよいよ展覧会が近づいてきました。個展、今までに何回と言われたら、数えきれないぐらいやってきましたが、何度やっても緊張するものですね。絵を並べ終わって見回した時点で「え、ダメだ、描きなおしたい」と思った事もありました。このままほったらかしにして、帰ってしまいたいとも。そういう展覧会では、見に来てくれた人たちが、いやな顔をして帰っていく。針の筵の何日間でした。そういえばオレの30歳代の絵はよくないですねえ。音楽家の方に、演奏会で大失敗なんてありますかと聞いたが、「良し悪しはあるけれど、大失敗は無い」との返事。オレの持論ですが、どんな人でも、アーティスト生活50年ぐらいのうちで、その人のアートが“素晴らしい時期”“輝いている時期”はせいぜい10年間、20年間しかない。後の何十年間かは“いい仕事”をしていない、出来ない時期だと思います。若いころに有名になって、“いい仕事”をしていた大先生の近作展を見て「ええ…ひどいな」なんて思うことはいつものこと。こんな仕事をしていたら、外国ならケチョンケチョンに言われるののだが、日本では有名人には甘い。ということは、日本では20歳代に跳べないやつはアカンということ。大器晩成なんてありえない、ということ。とオレも“ぼやき”はみっともない。

オレ売れない絵描きなので、すべてを自分一人でやっている。何度か画商さんが付いてくれたが、“売れない抽象画”はなかなか扱っていただけない。会場探し、案内状作り、額装、絵の搬入搬出、売れた先への納品と、仕事がいっぱいあります。今日はその中で飾り付けの話。何度も使っている会場ならば、どれぐらいの大きさの絵を何点持っていけば収まるかがわかっている。車から降ろして壁に並べてみる、壁に立て掛けてみる。大きい物はこっち、お気に入りはこちら、お気に入りの隣には、お気に入りが引き立つような、色合いの違う物、内容の違う物を置いてみる。作品どうしの間隔を見ながら、ああでもない、これはいかんと、考え悩みながら、並べていきます。「よし、これでいい」と決まったら、後は吊ればいいだけです。吊り方は会場によって色々ですが、今はほとんどの処が、天井にレールがあって、ワイヤーで吊り下げます。壁に直接釘を打って留める、壁に棚が作ってあってそこの置いて行くだけでいいということもありました。オレ背が高いけど、160センチぐらいの人の目線で吊り下げます。人の展覧会も含めて、何回も飾り付けはしました。飾り付けがうまくいくと、絵と絵が響き合って会場全体が響き合う。この仕事は緊張感があってなかなか楽しい。うまくいけば、いうことなしだ。

今回の展覧会、アトリエに立て掛けて在るやつ、木枠から外したが、まだ収納してないやつ、そんな中から選んだ。

額装をしないことにした。キャンバスを木枠に貼ったまま、という作品だ。オレの場合、キャンバスの側面は、絵の具の垂れっばなし、汚れっばなしだけれど、それも味だと思ってください。

0059 グルメの話 140412

額屋くそんな商売があるの、という方にちょっと説明。賞状、写真、絵などを入れる額だけを扱う店。普通、額は文房具、事務用品、絵画用品といっしょに売っていますが、うちの額はそこここに在る額とは違いますという、額の専門店があります>その額屋の“しゅうちゃん”と話しながら食いもの話に。「○○のうどん屋が旨かったが、先日行ったら店が閉まっていた。夫婦二人でやっていた店だが…」と、うどんの歯ごたえと、出汁の旨さをひとくさり。「○○の豚カツ屋、代替わりした途端にまずくなって行くのをやめた…」代替わり?とは、看板は同じだが、豚カツを作る人が変わって、まずくなったそう。「たかが豚カツだけど、肉を選んで、油を選んで、頃よく揚げて、ソースを選んで、一つ一つの工程の手の入れ方、気の使い方が違う。で一口食べたらわかる、まずい、だめ」だそう。そういえば、あちこちで、おっさん一人のうまい店がどんどんなくなって、会社組織のチェーン店が増えてきた。もう無くなった“弁慶”という店、オヤジが友達だった。最盛期の頃は文字どおり千客万来だった。彼のえらいところは、毎早朝、車で中央市場に行って、魚をしこたま仕入れて、これでもかというぐらい客にサービスしていた。「チト高いけ

ど、物がいい、旨い」と客が来た。会社組織の店が増えて、客足ががたりと減った。今はオヤジー人の店は流行らない時代なのかもしれない。

本屋の“サブちゃん”ハウジングの“ジュンちゃん”“みっちゃん”と飲み屋に。「このホタルイカの沖漬、ちょっと浅い」「サブちゃん」がいう。味おんちのオレ、旨いと舌鼓を打っていたのに。彼は旨い店によく行って食っているようだが「え、それは食べていないぞ」と後日によくいう。飲み出したら箸を動かさないノミスケの典型タイプ。人には「食え食え」と言いながら自身は食が細い。味おんちとはいえ、彼の意に反して、浅い沖漬はやはり旨い。鶏皮とナスビの煮もの「鶏の皮だけ・・・」と“みっちゃん”がいやそう。そんなに嫌かなあと思いながら、オレも食わなかった。「沖漬は船で釣りに出る時、前もって醤油、酒、味醂をまぜておいて、烏賊が釣れたらすぐドボンと漬ける。烏賊が醤油たれを思い切り吸うので、旨くなる」と“ジュンちゃん”なるほどそれで沖漬か、その話を聞くだけで旨そう。しゃべりの彼、話は釣りの事でまだまだ続く。「太刀魚は腹の巾を、指三本、指四本と言って大きさをいう」と元ラガーマンの太い指で、太刀魚の大きさをいうが、彼の指、普通の人の倍あるのではとおかしくなる。以前、別の友人の大塚君が、それこそ腹の巾が手のひらサイズの太刀魚をくれた。釣りたての太刀魚は旨い。全く臭みがなくて、シコシコ、刺身とはこんなに旨いものかと思った。

むもんの“いっちゃん”の話を読んでいて感心する。「何処の○○がなんと旨い」それを読むだけで、彼の破顔を思い出し、旨そうだなと思えてくる。旨い物の話、他愛がないが、潤いになる。

0060 間違えた 160412

感覚の欠如、感性の欠如、この欠如概念は・・・と大げさな話ではないのです。今、電車が坂を下り始めて、地下に入ろうとした時点で「間違えた」と感じた。「間違えた」を感じるとはおかしな表現と思われるかもしれませんが、その前の段階で電車が淀川を渡り始め、雨上がりのぼんやりした午前の空気、水が草がいつものように見える、いつもの淀川だと感じていた。その前の前の段階で、すでに違った方向に曲がってしまっているのだけれども、いつものように、知ったお寺があり、大きな浄水場があり、桜がたくさん咲いている、とぼんやり感じていたのです。

何の事かと申しますと、若いころから乗り慣れた電車に乗って、十三駅に行きたかった。電車が来ているなと思って急いで階段を駆け上がったが、右に停まっていた電車の扉が閉じられたところだった。時たま閉じられた扉が開く事があるが、今日は電車はそのまま発車した。その電車の表示板に赤い色を感じたので、二駅で目的地に着く特急電車だと思った。左側の扉を開けた電車が待っていた。表示板を見ると緑色を感じた。緑色は目的地まで行くが五駅ほど停車する準急電車だと思って乗り込んで座った。ぼんやりと窓の外を見ていた。見慣れた景色、友人たちと会う楽しみ、電車が別の線に入ったことなど気付かなかった。車内で、駅でアナウンスがあったはず、分岐する駅で、標示が出ていたはず、そんな事が飛んでしまっていた。

今日はたっぷり時間があつた。分岐の駅に戻って約束の時間に十三駅に着いた。一人遅れたやつがいたので、爽やかに皆さんと談笑する余裕。こんな事が半年前にもあつた。夕方豊中駅に行きたかった。十三駅で乗り換えて、混んだ電車に立ったまま車窓を眺めていた。各駅電車だから五つ目ぐらいが豊中駅だと思いながら川を超え、次の川を超え、「このあたりは地震直後大変だった。崩れた家、ブルーシートが掛けられた屋根、埃でもやった街、道路のデコボコ」と車窓は神戸だとわかっているのに「西宮」とアナウンスがあるまで間違えているとは気付かず愕然。あわてて、十三駅まで後戻り、もうひとつの電車に乗って三十分ぐらいの遅刻。待ってくれていた友人に謝った。

「最近、地下に潜る準急電車ができた」と聞いた。慣れた電車とはいえ、恐る恐る、キョロキョロと確認しつつ行動しなければと反省。図版は頭の中の車窓の淀川を描いた。

もう少しでかいかなあ。絵へただねえ。

0061 去年の来廊御礼 190412

本日は岡村隆久展にお越しいただき・略く今回の文章を書こうとして、去年のが出てきたので載せます>

案内状にも書いていますが、「“いい絵”とはなんですか・」と聞かれて「ご自分がご覧になって、いいと思う絵が“いい絵”です」と答えた。感じるままに楽しんでもらえたらうれしい。「お～い、いい絵を描いているか？」と見に来て下さい。と書きました。あらためて「いい絵とは」と言われると困りますが、「いい絵でないとしたら」とは、私がいつもぼやいている常套句です。うまい絵も、きれいな絵も、高く売れる絵も、みんなだめ。素直で媚もなく、化粧のための化粧もない、そんな絵がいい。しみじみと心の琴線に触れる絵がいい。あとは、私が皆さんの絵を見て判断するしかないですね。「ああ、いい絵を描いていますね」といわせて下さい。感動する絵を見せてください。

と、えらそうなことを言いますが、我に返ると大変なのが自分の絵。自分自身の絵を客観的に判断するのは難しい。どう思われているのでしょうか。「つまらん」の一言やも、「一生懸命やるとるが・どうも」やも、「混乱しているのでは・」と、こんなふうかもしれない。私には描く作業が日常です。いくつかの画を壁にかけ、床に置き、次にどの色を入れようか、次にどんな線を入れようか、次にどこを消そうかと、悩み考え、それこそ何日目かに、いい感じになってきたと自分なりに納得します。今がいい、今の仕事が一番だ、今が最高だ、と思いついで、悦に入るが、少し前に描いた絵を出してきて、今の絵と前の絵をならべてみる。「前の絵の方がいいのでは・」と、愕然、迷う、悩む。「今が最高だ」と言っていた舌の根も乾かぬうちに、「前の方がいい」とは私はお前を信用できない、お前は自分自身を確定できないのか。迷わず「よしこれだ、これでいけ」と言えないのか、なんていつものこと、このように定まらないのが私です。逆に、迷わずに「決定、これだ、最高だ」と言える人などいるのかな、自信があるなんて本当なのかな、そんなに自分が信じられるのかなとも思うが、ま、人は人ですかね。

無為自然とはいいい言葉だ。えらそうなことを言わずに、解ったと思う尻から迷って、楽しんで悲しんで、絵の具遊びをして行く。

「どうでも いいのだ」「なんとでも なるのだ」赤塚富士夫の言葉はいいねえ。

図版は 展覧会行きは、どなたかなと、セレクト中の定点風景。

0062 魚の話 200412

大塚君より電話「たくさん釣れた、今から送る、全部締めてるからうまいぞ・明朝届く」彼は女学校の英語の先生をしていた。若いころは柔道一直線のイメージしかなく、荒っぽい奴かなと思っていた。今の彼は“徳の人”というイメージなのだ。ゆっくり歩く。あせらず騒がず、無然としかもニコニコしている。烏打帽をかぶっているので、知人の女社長「うちの左官職人みたい」という。酒は飲まないが、酒席にはいやな顔もせず出てくる。珈琲が好きで、喫茶店で、未だに煙草を燻らせている。「岡村君それは行きすぎですよ」とか「こうしたらみんなが納得してうまく行くよ」とよく諭される。社会生活に密着して、永年教育者生活を過ごしてきた彼の意見は、穏健でしかも的を得ている。オレが彼を“徳の人”という所以です。身体のでかいオレが彼の前では「ハハア」と脱帽である。

クール宅急便でやってきた魚君、大きさは手のひらサイズ。どうしようか、どう裁こうかと思案。朝に鱗と内臓は取ってある。この大きさの魚では、刺身にするにはオレの技量では至難の業。甘辛煮つけが、定番なれども最高か、と決めて、失敗は失敗の基と、一匹だけ片身ははずしてみた。大丈夫かなと皮もむけた。蒲鉾の一切れのような刺身が取れた。刺身の残骸は潮汁に。のこりの6匹は煮着ける。鍋に水、酒、味醂を入れて火に掛ける。醤油、砂糖を入れて6匹の魚を入れる。ぐつぐついつてきたら、アルミ箔をかぶせて10分程度煮詰める。無手勝流魚の煮着けの出来あがり。一切れの刺身、こりこり、甘い、旨い、最高、である。

「いただきます」「おいしいねえ」「うわあ、全然違うねえ」と女どもに痛く評判がいい。

図版は、よく我がブログを訪れていただき、歩歩様のまねをして、絵と墨跡？と言いたいが、下手だねえ。

0063 来廊御礼 220412

遠いところ足を運んでいただき、岡村隆久展をご覧いただきありがとうございます。この画廊での展覧会は、去年に続いて二度目です。来ていただいた方々が、「落ち着く、魚がいい、コーヒーが旨い」とアットホームな展覧会場になります。オーナーの木村さん、向井先生には、いい画廊を使わせていただき、感謝です。お二人との、いい出会いにも感謝です。去年は、会期中の金曜日いよいよパーティの準備をしようという時にグラグラ揺れた。あのような大惨事が起こってしようとは知る由もなく、ほろ酔い加減で帰って、ニュースを見てびっくりした次第です。

最近、自分自身の“立ち位置”という事を考えます。絵の事でも、生きていく事でも当てはまる事ですが、今は、絵を描くという事だけに限って“立ち位置”の話をします。絵を描くのに、何を描く、どう描くという事があります。何を描くということは、テーマはどうしよう、それをどう解釈していこうか、どのようにこなしていこうか、という感覚的な、感性的な、そして内的な思考の問題。どう描くということは、多分に技術的な事、しかも絵画制作の基本的な事、構図、空間、動き、色の事、絵の具の使い方、そういう言い古された問題です。その両方とも永い間試行錯誤を重ねて歩んできたので、あらゆることを試している、という自信があっても目から鱗「そういう立ち位置、そういう原点があったのか」と感激しています。と言いながらもこのような事は、ごく個人的な大発見かもしれません。明日になれば、大発見が、「つまらない失敗だった」と平然としているかもしれません。このように「わかった」「わすれた」とこれからも絵の具遊びをしていきます。ずっとおつきあい下されば幸いです。

一昨日絵の飾り付けをしましたが、床から棚にすっと上がられません。棚から床にすっと降りられません。「この高さがだめ・山に登れないぞ」と年を感じました。徐々に酒の量が減っています。「酒飲みの岡村」返上です、と言いたいのですが、ここからが本番。二週間前楽しき“飲み会”があり、普段減った分を取り戻そうと飲んだのでしょよね。朝起きると、ちゃんと着替えて整理までして寝ている。「昨日、どうして帰った、どうして寝たのだろう・・」と記憶の飛んだ状態。鏡を見ると目が赤い。若いころに何度か赤くなった。初めて赤くなった時は村田眼科に飛んで行った。「岡村君 こんなん ほつといたら 治るよ それより せつかくきたから ほかの病気を 診る 目 大事やもんね」と十歳代からの友人の先生。と若いころを思い出しながら、次の週も楽しき“飲み会”があつて、またまた減った分を取り戻した。あくる日起きたら、それこそ“マツカツカ”だ。ネットで調べると「結膜下出血 人が見たら 痛々しそうに見えるが 本人は何も感じない ほとんどの場合 ほつておいたら 二週間ぐらいで 出血が引き治る」とあるが、細い目が、黒と赤で白眼が無い「これはちょっと格好が悪いな、個展開近なのに・・」と反省しています。

来廊御礼と言いながら長々の饒舌を失礼しました。「皆様に見ていただける」という事を励みにまだまだ描いて行きます。よろしくお願いします。いい仲間がいて私は幸せです。

0064 花の話 250412

「どんな花が合うか、どう飾ったらいいか、作品によって変えています。一概に花といっても、季節があるでしょう。大きさも華やかさも香りも色も、赤、青、黄色と、それこそいろいろあるでしょう。画廊に置いてある作品が引き立つように考えているのですよ」と木村さん。今まで絵の傍にどんな花が合うのか、どう置けばいいのか、というようなことなど考えたことがなかった。花をいただいたら「ありがとう」と受け取って、花に絵に、お互い邪魔にならない隙間に置いていた。花にこだわって、花を飾ることによって、そこに集まる人や、物やら、その空間を演出しようとしている人がいるのだと、遅蒔きながらびっくり。花とはそういうものか・・と思った。

先日来、山の仲間のメールで花の話が、写真が、飛び交っている。衣川さんが、近所の田んぼで、花が満開だとその写真を載せている。「きれいでしょ。田んぼにいた女主人に話を聞くと、売り物じゃない、このせち辛い世の中で、皆さんに楽しんでもらえたらいい。近所の小学校の子どもたちが見に来てくれたらいい、と言っておられた…」と。澤山さんが、先日感動した話を、と。「京都の北の方の山に登った時に、櫻の苗木を植えている人がいた。京都市内に在る大寺、清水寺の修理に使うために植えているそう。苗木は何十年、何百年の後に清水寺の修理に使われるそう。その悠久の時間の流れに、日本文化の奥深さを感じた…」と。

木村さんと奥間さんが飾ってくれた花は、新芽が銀色に光る小枝、うっそうと河原に生い茂る草の中に垂れ下がる房のひとつかけら、谷間に濡れた葉を光らせている草のひとつかけら。机の上には木の実がなって、花が咲いて、虫が飛んできそうな、どこにでもある自然の世界のひとつかけらを演出している。絶句。「いい…」そこに竹内さんからピンクの立派な花が届いた。

山に登る時、登山口までは車で行ったり、バスで行ったり、タクシーの時もある。そこで着替えをして、山の服装、山の装備で出発する。登山口付近はまだまだ人工物がいっぱい、舗装された道路、電信柱、トイレ、夜になれば灯りが点く。そこから一時間も登っていくと、登山者が日に何人か通るぐらいの淋しい場所になっていく。淋しいというのは人がいうことで、そこに在る木も草も土も岩も淋しいなんて思ってもいない。ほとんど人の手が入っていない。木も草も土も岩もそれぞれが自分の勢力を伸ばし、いい感じに遠慮し、そこに在る。木も草も土も岩がほかの物をやっつけ、やっつけられ、ある物は隙間に入り込み、ある物は崩れ落ち、ある物は上へ伸びる。竹だけの処、針葉樹だけの処、檜があつて、枡があつて、樫がある処、たくさん名も知らない木々が生い茂る処、ガレ場といわれて、何度も崩れ落ち、岩肌土肌が露出し、緑の生える暇のない処。木の名前、草の名前、花の名前に疎いオレが、知っている名前を並べてみた。そういう景色、そういう空間に入っていくと、気持ちが落ち着く。気分がよくなって、壮大な気持ちになったり、幻想とも笑われるような夢を思い浮かべたりする。何も浮かばず考えず呼吸だけをしているという事もある、というより、そういう時の方が多かな。この自然がいい。自然が自分を自然にしてくれる。何も考えず、なにも思わず、自然になりきるのがいい。ただ厄介なのは雨が降る時、きつい風が吹きつける時、寒い時と、わがまま言いますがそういう時はいやですねえ。そう、熊も会いたくないですねえ。

今、画廊に飾られた花を見て思った。小枝、まだ緑に成りきらない葉、緑の草、小さい花畑の世界。

0065 展覧会が終わった 300412

展覧会が終わりました。会期は一週間といいますが正確には日曜日が無いので、六日間です。中日の水曜日辺りの天気予報が雨でしたが、滴がぱらぱら落ちる程度で、全く晴れの六日間でした。全日程、雨なしの展覧会なんて初めてでしょうね。またすごいことに、お客さんの絶える事のない日々で、昼食も食べられず、外に食べに行ったのは一回だけでした。足を運んでいただいた皆様には感謝々々です。今回はちょっといけなかったという皆様は、次回是非覗いて下さい。

終わって納品作業を済ませると、今までは完了でしたが、殊勝にも、前回から礼状なんてしゃれた物を書くようになりました。来ていただいた全員の写真を撮って送ったり、メールが通じる方にはメールで、と色々工夫をしています。今回もほぼ全員の写真を取りました。それをDPE屋さんで“はがき大”に焼いて、裏に住所とちょっとしたお礼の言葉を書いて送ろうかと考えています。写真は、ほぼ全員撮れたと思っていますが、話に夢中で、忘れた人もあるかもしれないし、パーティの時は写真どころではなく、中西プロと、ミカサンが中西プロの写真機でパチパチ撮ってくれたデータを、中西プロが送ったといってくれているので、待っている状態です。DPE代、切手代が100人分なら1万円足らずの出費です、痛いけど、ま、いいかな。これはグッドアイデアでしょう。

「今年は青と緑ですねえ」「モノクロに近い絵が並んでいますねえ、新しい感覚ですねえ」「のびのびやっていますねえ」皆さんの声も色々聞こえました。オレ自身、展覧会をしないで“ライフワーク”なんてふんぞり返っていたら、仙人のように描いていたら、本当に気持ちが腑抜けになってしまう、だれてしまう、毎日々に流されてしまう、ぼうっと絵をかかただけになってしまう。人がいて、人の目があって、日時を決めて、印刷物を配って、社会を、見てくれる人を、展覧会場を意識して絵を描くと、その緊張感が、ぐいぐい自分の精神を、感覚を押し上げてくれます。「よし、展覧会だ」と決まった半年、一年前から、精神の高揚、感覚が鋭くなってきて、最後の何日か前には、今まで解決できなかった事が、いとも簡単に解決できるとか、驚くような展開をしてみるとか、なんとなくいい方向に進んでいきます。“ライフワーク”なので“一生の仕事”なのでなんてのんびりじっくり仕事をする方もおられるが、オレはダメですねえ、展覧会をしないと、緊張感が無くなって、日々、ノホホンとなってしまうですねえ。

この展覧会が終わって、またまた悟りました。「オレ自身何もわかっていないし、まだまだフラフラ迷っている。何がいいのか悪いのか、何を表現しようとしているのか、オレってまだまだだねえ・・・」つまり、オレは、「何も解決していない」と悟りました。今回の展覧会のテーマは、今まで外から物を見ていたのを、内から見る、立ち位置を変える、原点を変える、そのことで何かが変わった、と思っていましたが、展覧会が始まって毎日自分の絵を見ていると、何をつまらぬことを言っているのだと、自分の理屈がつまらなくなりました。だからオレは、「何も解決していない」と悟りました、ということです。「内だ、外だ」「立ち位置だ」「原点だ」と叫んでも、絵が「つまらぬことを叫ばなくてもいいよ、何も考えないのが一番いいよ」と、言ってくれているようでした。

図版は、中西プロが、撮ってくれた。アマゾンの魚、コーヒー、ゆったりした画廊。